

短篇
名作選

母の肖像
三浦哲郎

構想社





© T. Miura 1983

母の肖像

一九八三年九月一〇日第一刷発行

定価一四〇〇円

著者 三浦哲郎

編集者 藤野邦康

発行者 平野明久

発行所 株式会社構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六

〒101 電話(03)三九四一六六七
振替口座(東京)一五五九七

印刷所 新陽印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替えいたします)

ISBN 4-87574-036-0

短編名作選『母の肖像』目次

おふくろの妙薬 7

柿の蒂 19

おふくろの消息 37

ジャスミンと恋文 47

拳銃 57

土橋 73

乱	笔	離	お	化	水
舞	る	郷	らん	粧	仙
169	155	137	だ	101	85
			帽子		

おふくろの筆法（随筆）
187

娘たちの夜なべ（随筆）
193

かりがね通信（書きおろし）
199

二重の視線
三浦雅士
221

著者あとがき
247

短
編
名
作
選

母
の
肖
像

装 幀
田 中
美 子

おふくろの妙薬

私は、もはやニコチン中毒で、朝、寢床のなかでまず一服しないことには、目が醒め^さない。夜も、枕許に煙草とマッチと灰皿が揃っていないと、火鉢の灰を掻き廻して吸殻を探している夢をみたりする。

私は煙草ならなんでもいいが、普段は手軽な紙巻煙草をやっている。たまには、パイプも悪くない。なんにもせずに、細身の葉巻をぼかんとふかしているのも、私には一つの快楽である。家にいるときは、煙管^{きせる}で刻み煙草を喫うこともある。

ちかごろ、東京では、煙管を用いる人などあまりいなくなったものとみえ、街の煙草屋に刻み煙草がないことが多い。それで、デパートの煙草売場でみかけたときや、地方へ旅行に出たときなどに、一と袋、ふた袋と買って帰って、ブリキの罐^{かん}に蓄えておく。それを思い出しては喫うわけである。

煙管ですばすばやっていると、客に、おや、「肺ガン予防ですか。」といわれることがある。「煙

管とはまた古風ですなあ。」という人もいる。「そんな爺むさい真似はよせよ、みつともない。」という人もいる。

けれども、私は別に肺ガン予防や老人趣味で、刻み煙草を喫うのではない。私はただ、早く煙管にヤニが溜ってくれるといい、なるべくたくさんヤニが溜ってくれるといい、そう思いながら、いわばただそのヤニだけのために、煙管を使っているのである。

それでは、煙管にヤニが溜ったときはどうするかというと、用意しておいた紙に、そのヤニを採る。紙といっても、ただの紙ではなく、かつて私の家が呉服屋をしていたころに使用していた大福帳をばらした丈夫な和紙で、それを十円玉より一と周り大きく切ったやつに、ヤニを採るのだ。

煙管を掃除するときのように、焼いた針金をジュッと差しこんで、採れたヤニをその紙に塗りつける。ちいさな紙だから、いちどの掃除で何枚分も採れる。ヤニを塗り終えた紙は、二枚ずつ貼り合せて、とっておく。煙管ですばやつているうちは、まだいいが、この作業にとりかかると、われながら多少ばかかしい気がしないでもない。けれども、郷里にいる老母の頼みなのだから、仕方なしにやるのである。

私の郷里では、煙管のヤニのことをニタといっているが、私のおふくろは、そのヤニを塗りつけた紙のことを『ニタの薬』といって珍重している。なにに効く薬かという、それが眼病の薬だという。

まさか、煙管のヤニが眼病に効くとは誰も思わない。私にしても、自分でその薬を製造しながら不思議でならないのであるが、実際、それが目ボシという眼病によく効くらしい。目ボシというのは、目玉の黒い部分にぼちり星のような突起物が出来て、それだけでも目のなかがごろごろして叶^かわないのに、それがひどく痛んだり、目が次第に霞んできて遂には失明したりするという、厄介な病気である。正確な病名はわからないが、私の郷里の人たちは目ボシといっている。

ところが、私のおふくろは、『ニタの薬』を用いてこの目ボシをきれいに直す術を知っていて、それを知っている者はこの世に自分しかないと思ひこんでいる。おふくろは、医者でも、医者の娘でもなんでもなくて、もうそろそろ八十に手の届くただの年寄りにすぎないが、実際これまでもおふくろの手当を受けて、直らなかつた人は一人もない。大学病院で、匙^{さし}を投げられたという人が、『ニタの薬』ですっかり直ってしまったこともある。

それでは、その『ニタの薬』を直接目ボシに当てるのかというと、そうではない。よく、詰まつた煙管を、無精して、強く吹いたり吸ったりしているうちに、ヤニがちいさな玉になってストンと口のなかに飛びこんでくることがあるが、大層にがい。うっかり呑みこんだりすると、喉が焼けるようにひりひりする。あんなものを目のなかに入れたら、目ボシと一緒に目玉も潰れてしまう。

『ニタの薬』は、なんと、患者の肩や背中に、膏薬のようにべったりと貼りつけるのである。目

を肩や背中直すとは、ちょっと解せない話だが、これできれいに直るのだから妙である。目が疲れると、肩が凝ってくるから、目と肩や背中の間になにか繋がりがあることはわかるが、それにしても、煙草のヤニとは、昔の人は奇抜なものに目をつけたものだ。

けれども、この治療法は私のおふくろの創案したものではなくて、おふくろがまだ娘時分に、思いがけないところで、思いがけない人からおそわったのだということである。聞いてみると、なるほど思いがけないところで、思いがけない人からおそわっている。

私のおふくろは、十五、六のころ、ある骨身に応えるような出来事があって、一日中泣きじゃくっている日が一と月ほども続いたことがある。おふくろの祖母が心を痛めて、医者には神経衰弱だから転地をするといった。

転地といっても、北国の田舎のことで適当な保養地がみつからない。祖母は仕方なく、自分が神経痛のとき一、二度湯治にいったことがある山の温泉場へ、おふくろを馬に乗せて連れていった。

山深い谷間に湯宿が一軒きりの、土地の人たちが『岳の根の湯』^{だけ}といっている湯治場である。祖母は大事をとって、その宿に一と間しかない一等室という座敷をとってくれたが、一等室といっても山のなかの一軒宿のことで、よその部屋に比べて畳が敷いてあるだけ増しなような座敷である。それでも、宿の一番奥まったところにあつて、廊下を通る足音をうるさがらずに済むのが

ありがたかった。廊下の突当りには、ちいさな梯子段を登って物置が一つあるきりである。

医者という転地がよかったのか、それとも温泉が効いたのか、二日もすると、ふいに泣きじゃくりはじめるというおふくろの発作が、おさまってしまった。五日もすると、思い出すだけで虫酸の走るようだった人のまぼろしも、すっかり薄れて、町での出来事がいつかみた夢のように遠退いてしまった。

その湯治は、昔から三週間で一と区切りとされていて、湯治にきた人々はすくなくても三週間は宿に滞在する。湯のほかはなにもない山のなかだから、客たちは退屈しのぎに花札をしたり、嫁取り遊びとって爺さん婆さんが大勢集り、その場で仮りの花婿花嫁をひと組拵えて、さあ、今宵は村の婚礼の夜、飲めや歌えの大騒ぎを演じたりする。

ある日、湯疲れしたおふくろが、縁側から両足を垂らして嫁取り遊びの歌声をぼんやり聞いていると、そこへ馬で男の客が二人着いた。馬は一頭だけで、背中に蒲団包みを振り分けにして、その上に頭から頭巾をすっぽりとかぶった一人がまたがり、もう一人の若者は馬の轡をとっていた。

二人は、客部屋が一杯だというわけでもないのに、なぜかおふくろたちの座敷の奥の物置に案内され、しばらくすると、若者だけがさっきの馬に乗って帰っていった。それきり、頭巾の男がいる物置はひっそり静まり返っている。祖母が氣にして、宿の主人に訊ねたところ、物置の客が実は癩病持ちだということがわかった。

宿の主人の話によると、その客は山向うの寺の住職で、若いころは目鼻立ちの整った、読経の声のほれぼれするような坊さんだったが、村の呉服屋の娘が押しかけ女房に入って十二年目に、思わぬ病気が出たのだという。このあたりでは、昔から川で獲れる鮭とカボチャと一緒に食えば、食中^{きちゅう}りするといわれているが、坊さんはそれを嗤^{わら}って、信心する身に食べ物が中るわけがないと、檀徒の前で何度となく鮭とカボチャと一緒に食べてみせたそうだが、腹痛^{はらいた}どころか、世にも忌^いましい病気が出てしまった。

それからもう十年にもなるが、いまでは頭の皮がずるずるに剝^はけ、耳は大きく脹^はれて垂れさがり、鼻も流れてしまったので、ああして頭巾で人目を避けている。このたびは息子に送られて湯治にきたのだが、なにぶん坊さんなので断るわけにはいかず、それかといって客部屋に入れるわけにもいかないので、物置で辛抱して貰うことにした。湯治といっても、客用の湯殿の外に板囲いをして、そこに洗い桶を置いて別に湯を引くつもりだから、その点心配なさらぬようにと、宿の主人はそういった。

物置の坊さんは、湯の行き帰りのときだけ、足音を忍ばせておふくろたちの座敷の外の廊下を通る。湯殿にいと、外の粗末な板囲いのなかから、なるほど張りのあるいい声で唄をうたうのがきこえてくる。すると、湯のなかで首を振り立てていた爺さん婆さんたちが、誰からともなく口を噤^{つぶ}んで、聞き惚れてしまう。坊さんながら、なかなか粋な人だとみえて、はらはらするほど艶^{えん}っぽい唄を気持よさそうにうたっていた。